

ISBN 978-4-86337-050-0
Studia Culturae Islamicae No.77(3)

Bulgarian Folk Songs
from the Village of Davidkovo
Inhabited by Muslims and Christians

(3) Notes

Edited with notes by
Kenji Terajima

— イスラム教徒・キリスト教徒共住村 —
ダヴィドコヴォ村民衆歌謡集

(3) 注釈編

寺島憲治 編著

2009

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

**Bulgarian Folk Songs
from the Village of Davidkovo
Inhabited by Muslims and Christians**

(3) Notes

**Edited with notes by
Kenji Terajima**

— イスラム教徒・キリスト教徒共住村 —

ダヴィドコヴォ村民衆歌謡集

(3) 注 釈 編

寺島 憲治 編著

Research Institute for Languages
and Cultures of Asia and Africa (ILCAA)
Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho
Fuchu-shi, Tokyo 183-8534
Japan

Printed by
Sanrei Printing Co., Ltd.

まえがき

本書は、『ダヴィドコヴォ村民衆歌謡集』(1) テキスト編に収録した民衆歌謡の全訳である。

民衆歌謡は、不特定多数の読者を対象とする小説などと異なって、聞き手を眼前にして歌われる。聞き手は、多くの場合、価値観や生活形態を共有し同じ共同体に暮らす人びとである。そのため、互いに了解される事項は省かれ、描写は極度に単純化され画一化される。美しい娘は、せいぜい「すらりと細身で背が高く、顔は色白で、瞳は黒く на снашка тенко високо, / на лице бело, черноко」と歌われるだけである。彼らを取り巻く森も、「緑の森 гора зелена」と歌われるだけで、細かに描写されることはない。若者と娘のあいだで交わされる花束も同様で、「赤い花束 китка червена」と素っ気ない。

しかし、歌い手も聞き手も、「森」や「花束」がシチュエーションに応じて担う意味を心得ており、かつては自身も暗黙の了解のうちに「森」に逃げ込んだり、「花束」を胸につけたりしたのだ。歌い手やインフォーマントと話してゆくうちに、無筆の村びとが「花束」や「胡桃の葉」で文を交わし、娘や若者が相手のしぐさや身にまとう衣装にさまざまな印を読み取っていた時代のあったことを知った。歌われているのは、そんな印に満ちた世界である。

伝承されるテキストは、恒常不変ではない。作者不定の開かれたテキストは、時代に寄り添いながら様式と内容を変化させ、そこに盛られる意味や語彙も変えてゆく。時を隔てて採録された歌は、見た目には同じでも、歌い手や聞き手の受け取り方ががらりと変わることも多い。そして、急激な時代の転換期を経て人びとの意識にそぐわなくなると、急速に歌われなくなり、忘れ去られてゆく。

この地方は、20世紀初頭までオスマン帝国領内にあつて、自治的な伝統が強く残っていた地域である。人びとには、帝国に暮らす住民としての意識はあつても、帝国への帰属感は薄かった。仕事仲間や結婚など人と人をつなぐ絆は、彼ら自身の暮らす共同体を基礎に形成されており、人びとの帰属意識はまずもってこの共同体にあつた。そこを核として、移牧や出稼ぎで培われた言語や宗教を超えるネットワークが広がり、多様な人びとの協力関係を生み出していた。仕事上のつきあいから生まれた信頼があつたからこそ、男たちは、時として、キリスト教とイスラムという宗教上の違いに縛られることなく義兄弟関係を結んだ。

村の北西に聳えるスヴォボダ山の山頂に葬られているイスラム聖者イエニハン・ババは、北西のクラストヴァ・ゴラ（十字架山）のイエス・キリストと義兄弟の契りを結んでいるとする伝説が、北西のラキの町に伝えられている。ダヴィドコヴォ村には、イエニハン・ババは、キリスト教の聖人イリヤに他

ならないとする話が伝えられている。エーゲ海沿岸の都市クサンティから出発して、ギリシア側のロドピ山中の村メドゥサ Μέδουσα (ブルガリア名メンコヴォ Менково) のイスラム聖者廟を經由してイエニハン・ババ廟に詣で、トラキア平原にあるこの地方最大のイスラム修道所(テッケ) オスマン・ババ廟に通じる巡礼の道のあったことが知られている。夏になると、イエニハン・ババ廟には多くの参拝者が訪れ、彼らを目当てに行商人たちが週市に集まり賑わいを見せたという。イスラムの祭礼市であったが、規模の大きなものだっただけにキリスト教徒の足も市へ向かった。

ダヴィドコヴォ村は、かように、地域に根ざした共同体でありながら、異なった宗教や言語、民族にも開かれたネットワークを持っていた村であった。この村が、国民国家ブルガリアに包摂されて行くのは 19 世末から 20 世紀初頭のことである。

そのような村に伝えられてきた歌だからこそ、地域に密着した解釈が必要になってくる。そこで、字面だけを追っていても歌が理解できないと知ったとき、浅才をかえりみず無謀にもテキストの全訳に乗り出した。果たせるかな、採録地に則して 1 つ 1 つの歌を解説した民衆歌謡の注釈書は前例がなく、険路隘路、時には行き止まり道に迷い込みながら紆余曲折を経て何とかここまで至った。採録当初からお世話になっている村の公民館職員ビンカ・シャラマノヴァ Бинка Шаламанова さん、村長セヴダ・チョラコヴァ Севда Чолакова さん、村の歌い手やインフォーマントたち、ロドピ地方の村誌収集にお力を貸して下さったスマリャン県立図書館のスタッフたち、収集資料の閲覧に便宜を図ってくださり貴重なご意見をくださったブルガリア科学アカデミー・フォークロア研究所の研究者たちのご協力がなかったら、ここまでたどりつくことはなかったろう。

残念なことに、優れた記憶力でかすかすの歌を歌ってくださったファトメ・デルヴィシェヴァさんと、鉄パイプに指穴を開けた自家製の笛で伴奏をしてくださった居酒屋の店主カジムさんが他界した。ここに記してご冥福を祈る。お二人の歌と演奏は、付属の CD に収めてあるのでお聞きいただきたい。

日本では、東京外国語大学研究協力課全国共同利用係の前係長の佐藤公生さんと出版物担当の竹内三輪さんが、怠惰な筆者を叱咤激励し本書の作成をコーディネートしてくださった。紙面を借りて感謝の意を申し上げたい。

本書の出版については、今回も、アジア・アフリカ言語文化研究所元所長の上岡弘二先生にご尽力をいただいた。この向こう見ずな試みをいつも温かく見守ってくださり、さまざまなご助言をいただいた。末尾になったが、ここに最大の謝意を記しておく。

2009 年 8 月

寺島 憲治

採録地ダヴィドコヴォ村について

テキストを採録したダヴィドコヴォ Давидково 村は、ブルガリア南部の中部ロドピ地方に位置し、行政上、スモリヤン Смолян 県バニテ Баните 郡に属する。村の地理的位置は、東経 24 度 58 分、北緯 41 度 40 分で、標高は 1000m である。村から、ギリシアとの国境までは南に直線距離で約 30km、エーゲ海沿岸のギリシアの都市クサンティまでは距離で約 60km である。

緯度は、ほぼ函館市に等しいが、内陸・地中海性気候に属し、ブルガリアの中心部やドナウ平原地方に比べて冬でも比較的温暖で、夏は涼しい。この地方の 1 月の平均気温は 0 度前後で、7 月の平均気温は 20 度を越えない。年平均降雨量は、約 1000mm と比較的多いが、うち約 300mm は冬に集中している¹。

このような気候条件のために、穀物の生産はあまり行われておらず、エーゲ海沿岸の放牧地を冬営地とする移牧型の牧羊や出稼ぎが長いこと人びとの生計の糧となっていた。しかし、20 世紀に入ってこの地方がオスマン帝国の領域から離れ、ギリシアとブルガリアのあいだに国境が引かれると、国境を越えた移動が困難になり、大市場のイスタンブールとの結びつきも切れたために、移牧型の牧羊は急速に衰退し²、代わって、冬は飼料作物を用いて畜舎で飼育する近隣放牧型の小規模な牧羊や、飼料作物、じゃがいも、タバコなどの生産が行われるようになった。

村の西にはプレスパ Преспа 山 (標高 2000m) が聳え、北にはスヴォボダ Свобода 山 (標高 1943m、旧名イエニハン Ени Хан 山)、トゥズラタ Тузлата 山 (標高 1856m)、エルヴァルニカ山 Елварника (標高 1714m) が村を囲んでいる。これらの山群は、南のアルダ川 Арда 水系と北のマリツァ川 Марица 水系の分水嶺となっていて、村はこの山塊の南東麓の標高約 1000m の斜面に広がる。

このような地形のため、北部と西部は森林資源が豊富で、森を切り開いた放牧地も広がる。これらの山群を越えてゆく道が、かつて羊群の移動や交易路として用いられていたが、牧羊業の衰退や自動車道路の整備にともなって旧道は打ち捨てられ、今では未整備のまま取り残されている。

村の幹線道路は、南東ある近隣村バニテ Баните 村を經由して、マルカ・アルダ Малка Арда 川沿いに走るスモリヤン Смолян - カルジャリ Карджали 街道につながっている。道路距離でみると、郡の中心のバニテ村までは 15km、県都のスモリヤンまでは約 70km、東隣のカルジャリ Кърджали 県の同名の県都までは約 75km、首都ソフィアまでは約 280km である³。

この村の起源については諸説あり、明確なことは知られていない。旧村名ダヴーデヴォ Давудево は、村の礎を作ったダヴード Давуд なる人物に由来するとも伝えられている⁴。17 世紀後半にイスラム化

が進展し、キリスト教徒とムスリムの共住村として発展した。しかし、後にこの村はペストのために放棄され、その後また新たに村が開かれた⁵。19世紀後半に入ると牧羊業が栄え、村には数千頭の羊を所有する羊飼いが出現した⁶。採録されたテキストは、歌われている生業形態や規範意識からみて、この時代以降のものが多くを占めている。

それらの歌の問題は、個別の注釈に譲るとして、村の基本的な情報を記しておく。村には、モスクと教会がそれぞれ1つずつある。最初の教会は、1878年に創建された。2階建ての建物で、1階が学校、2階が教会として利用された。1922年に新教会堂の建設計画が持ち上がり、1924年に「聖イリヤ教会」が村の中心部に完成した。

当時の人口は、1920年の人口統計によれば、総人口1461人で、東方正教会のキリスト教徒が230人、1231人がムスリムであった。ムスリムは、1名のトルコ人を除いて全員ブルガリア・ムスリムである⁷。村の人口は、1950年代まで増加を続け、1956年の調査では2260人を数えたが、以降、徐々に減少し続けた。社会主義体制崩壊後初の1992年の国勢調査で1451人を数えた人口⁸も、市場経済の進展とムスリム系住民にたいする規制が解かれたこともあって、若年層を中心に人口が急激に流出し、2008年に村役場で得た情報によると、テキストを採録した2002年時点では約1000人に、2008年には約800人にまで減少している。ムスリムとキリスト教徒の人口比は、ほぼ9対1の割合である。

-
1. География на България, БАН, София, 1997, стр. 114-118. 標高のほぼ同じスモリヤン市の1月の平均気温は、零下0.9度、7月の平均気温は17.9度、年平均気温は8.5度である。(Енциклопедия България, т. 6, стр. 296.)
 2. この問題は、経済史の問題としても論じられているが、民族学的な観点からヴァカレルスキも言及している。вж. Вакарелски-1977, стр. 133-134.
 3. Т. Найденов, Община Баните, Изд. “Български лекари”, 2008 г., стр. 5.
 4. СБНУ, кн. 54, стр. 217.
 5. Надя Манолова-Николова, Чумовите времена (1700-1850), “ИФ-94”, София, 2004, стр. 299. この話は、インフォーマントたちもたびたび話題にしている。
 6. Т. Найденов, Цит. съч., стр. 40. 牧羊業の隆盛の背景については、IV-Gの解説を参照。
 7. Преброяване-1920, стр. 2-3.
 8. Преброяване-1992, стр. 127.



ダヴィドコヴォ村を中心とする中部ロドピ地方とエーゲ海沿岸部

歌謡集に見られる方言的要素について

標準ブルガリア語の基本的な知識を持つ読者を念頭にして、ダヴィドコヴォ村で採録した民衆歌謡を理解する上で必要と思われる方言的要素について最小限触れておく。採録された民衆歌謡には、他の村や地域から伝承されたと考えられるものもあってダヴィドコヴォ村本来の方言ではない要素も含まれている。ここではそれらも含めた方言解説であって、採録歌からダヴィドコヴォ方言だけを抽出し、体系的な記述を目的としたものでないことは、論をまたない。20世紀後半に入ると、標準語が学校教育やマスメディアを通して広く浸透してきているので、方言と標準語の関係についてもいくつか指摘しておく。

ダヴィドコヴォ方言の位置

ブルガリア語は、東西の2つの大きな方言域に分かれる。ダヴィドコヴォ村は、東方言に属する。その東方言は、北東のミジア方言、中部のバルカン方言、南東方言の3つに分かれる。南東方言は、ルパ方言 Рупски говори とも呼ばれるが、ルパ Рупа という地名が、1912年のバルカン戦争以前に用いられていた歴史的地名で現在は用いられないこともあって、ルパ方言に代えて南東方言 Югоизточни говори という名称が普及しつつあり、ここでもその名称を用いる。

南東方言は、東部南東方言、中部南東方言、西部南東方言の3つに分類され、ダヴィドコヴォ村は、中部南東方言に属する。この中部南東方言は一般にロドピ方言と呼ばれており、ここでもこの用語を用いる。このロドピ方言は、さらにほぼ東から、

- 1) ズラトグラド方言、
 - 2) フヴォイナ方言、
 - 3) スモリャン方言、
 - 4) シロカ・ラカ方言、
 - 5) チェピノ方言、
- および、この地方からプロヴディフ地方やブルガリア中北部に移住したカトリック教徒の用いるパヴリキヤニ方言 Павликянски говор の6つに下位区分される。

ダヴィドコヴォ村は、スモリャン方言域に属するが、古代教会スラヴ語のイェル音や鼻母音の変遷から見るとフヴォイナ方言の要素も強く認められる。

民衆歌謡と方言の現れ方の特徴

村びと同士の日常会話で用いられるダヴィドコヴォ方言に比べて、採録された民衆歌謡には今では用いられない古形や古語、廃語が多く観察される。また、ダヴィドコヴォ方言にはない隣接諸方言の要素

も観察される。中部ロドピ地方では、歴史的、政治的、経済的な経緯から県都であるスモリャン地方の方言が優勢で、ロドピ地方の民衆歌謡もこの地方の方言で歌われたものが、マスメディアで普及したために「正調」とみなされる傾向がある。そのため、私たちの採録した民衆歌謡では、伝承関係や諸方言間の力関係を反映して、歌によって方言の現れ方に差異が認められる。このことは、歌い手が、歌の種類によって異なった対応を示す重層的な帰属意識を知るうえでも興味ある。その特徴は、おおよそ、次の3つにまとめられる。

- 1) スモリャン市を中心とした中部ロドピ地方一帯で流布している歌では、有力方言のスモリャン方言に合わせる傾向が認められる。この傾向は、村外の人との接触が比較的多い男性に強い。
- 2) ダヴィドコヴォ村と近隣村の狭い範囲で流布している歌では、隣接方言とのわずかな相違を強調する傾向が認められる。
- 3) ブルガリア全体に流布しているタイプの歌では、より遠方のトラキア方言や標準語の影響を受けやすい。このタイプの歌には、テーマが一言語の枠を超えてギリシアやマケドニア、あるいはセルビアなどに広まっているものもある。

民衆歌謡に見られる方言と標準語

ラジオ、テレビ、レコードなどマスメディアの普及や標準語教育の進展にともなって、民衆歌謡に方言と標準語の混用や標準語による意図的な言い換えが認められる。以下、(標)は標準語、(方)は方言を表す。また、(IV-F-1)などの表示は、テキスト編の採録歌の章、節、歌の各番号を表す。

- ・ кина (方) / какво (標)

Чем оти ут кина ли е, / чем оти ут какво ли е ? (IV-F-1)

- ・ попрелки (方) / поседенки (標)

збират ли моми попрелки, / попрелки и поседенки, (IV-K-9)

- ・ 形容詞派生における方言と標準語の混用

светкалифка (IV-K-9) ロドピ方言から派生させた形容詞

светалифка (IV-K-8) 標準語から派生させた形容詞

他言語との接触の影響

採録地ダヴィドコヴォは、オスマン帝国領内にあった20世紀初頭まで移牧や出稼ぎ労働が栄え、エーゲ海沿岸地方とのあいだで人、モノ、家畜の移動が頻繁に行われた。これらの地域は、またブルガリア語、トルコ語、ギリシア語など系統の異なる複数の言語が接していたため、民衆歌謡にもその影響が

現れている。語源の異なる同義語や類義語の併用の例をいくつか挙げておこう。

- ・ギリシア語とブルガリア語

*Ако си търнал, любе ле, / кер да кердосваши, / кер да кердосваши, любе ле/
и да печелиши, (IV-L-5)*

- ・トルコ語とブルガリア語

*лефтера да си походем / и любе да си избирам, / какво мене екранан,/
екаранан и прилегана. (V-A-1)*

- ・ブルガリア語とトルコ語

турци не са минавали, минавали, кондисвали. (II-7)

母音

- ・イェル音の変化

古代教会スラヴ語のイェル音 ѣ は、スモリャン方言では広母音の ô に、フヴォイナ方言ではあいまい母音の ѣ への変化の傾向が認められる。もう 1 つのイェル音 ѣ は、現れ方のばらつきが大きい。

- ・鼻母音 ꙗ と ꙗ の変化

ロドピ地方の方言において、古代教会スラヴ語の鼻母音 ꙗ と ꙗ は、いわゆる第 2 次イェル音¹に変化し、この音が、さらに各々 ô/ъ と 'ô/e/'ъ に変化して現在に至っている。ꙗ > ô/ъ の変化の現れ方には規則性と地域的な特性が認められるが、ꙗ > 'ô/e/'ъ の変化は、現れ方に地域的にばらつきが多い上に、他の母音への変化も観察されて複雑である。後者の鼻母音について、採録された民衆歌謡のなかからダヴィドコヴォ方言特有の規則性を認めるのは難しい。

- ・母音 : ꙗ - ô - ѣ

古代教会スラヴ語の ꙗ にさかのぼる母音は、マルカ・アルダ Малка Арда 川を境に、南と西ではスモリャン方言に特有の開いた母音 ô となり、北ではフヴォイナ方言でも観察される ѣ と発音される。ダヴィドコヴォ方言は、この母音について言えば総じてフヴォイナ方言に近いが、採録歌には両方言の母音特徴が並存している場合が観察される。例えば、IV-F-3 では 2 行目で рокана、4 行目では рѣки と歌われており ô と ѣ が混在している。私たちの採録したテキストでは、村内を生活や労働の拠点としてきた女性の歌い手の歌に、このような母音の混在があまり観察されないのは興味ある。

1. Мирев, стр. 115-116.

子音

ロドピ方言では、子音 **ч**、**ж**、**ш** は、標準語とは異なって軟音性を伴っている。そのため、標準語でこれらの子音に後続する母音 **a** は、しばしば **e** に変化する。

名詞の性

標準語で女性名詞扱いの **вечер** など子音に終わる名詞は、ロドピ方言では男性名詞として扱われることがある。

сърцесо ма пари / за сношния вечер, (V-C-5)

しかし、標準語の影響を受けて揺れが生じている。

сърцесо ма боли / за сношната вечер, (V-C-4)

また、ロドピ方言では **ч**、**ж**、**ш** が軟音で後続の **a** が **e** に変化するために、性の扱いで揺れが生じる場合がある。トルコ語の **köşe** に由来する **къоше** 「角、隅」は、標準語で中性名詞とされるが、ロドピ方言では **кюше**、**къоше**、**кише** など諸形で現れ、性の扱いに女性 / 中性の揺れが認められる。私たちの採録歌では、しばしば女性名詞として現れる。

名詞の複数形

ロドピ方言の男性名詞の複数形は、通常、複数語尾 **-и** あるいは **-e** で形成される。一般に、**-ар**、**-тел** など歴史的に軟音だったものや、ロドピ方言で軟音とされる **-ач** などの語尾をもつ人を表わす名詞は、複数語尾 **-e** を取る傾向があるが、その現れ方には **офчари** ~ **офчере** (IV-B-10) と揺れがある。

двор は、**дворове** ~ **двори** ~ **дворе** のように、しばしば揺れが見られる。

また、標準語と異なるも複数形を持つものも観察される。

лоши ѝе съне сънила (сънища) (VI-A-5)

名詞の格

・男性名詞の与格

-y の語尾をとる男性名詞与格形に、さらに人称代名詞与格短形を付接して形成される与格形が古いタイプのロドピ方言に見られる。ただし、採録歌では、母音の変化や脱落のために、その形が変則的である。

как седи на skut Османму, < Османуму (V-B-1)

мижумо кепе да предат. < мижуму (VI-A-2)

・女性名詞の与格

人を表す名称および固有名詞で古いタイプの与格が保持されている。

Марийки майка думаше, мари, (VI-A-5)

Марийки лобе носеше, (VI-A-5)

指小形

指小接辞に *ч*、*ц*、*к* の音を含む指小形にさらに方言的指小接辞 *-ле* を重ねて形成される指小形が観察される。

чи ми ѝе моето братчеле. (VI-B-1)

名詞の後置冠詞形

ロドピ方言は、遠称、近称、総称の3要素からなる後置冠詞形を備えている。

	近 称	遠 称	総 称
男性	-ъс, -ас, -ôс	-ън, -ан, -ôн	-ът, -ат, -ôт
女性	-са	-на	-та
中性	-со	-но	-то
複数	-се	-не	-те

近年では、総称のみを用いる標準語の影響を受けて、この地方の民衆歌謡でも総称の後置冠詞形が徐々に優勢になっており、リフレイン部分にその混用が認められる。

как ми кайдиса братчето, / как ми кайдиса братчено (VI-B-1)

形容詞

古代教会スラヴ語の形容詞形成接辞 *-нь* では、強位置にある *-ь* が後代に完全母音化するが、ロドピ方言のなかでも南部は *ь > a / ъ* に、北部は *ь > e* に転移する。ダヴィドコヴォは境界領域にあり、そのために形容詞の語尾には *-ен* と *-ан* の二つの形が混在している。

лу сое летен ден байрем (V-A-1),

лу соје летан ден байрем (V-A-2)

人称代名詞

ロドピ方言で主として用いられる人称代名詞は、次の通りである。

		単 数			複 数								
		主 格	与 格	対 格		主 格	与格	対格					
1	長形	е, ѝе, ѝес, ас ¹	мене, мен	мене, мен	長形	не, нис ¹ , ний	нам	нас					
	短形		ми	ма, мѝ	短形		ни	на					
2	長形	ти	тебе, теп	тебе, теп	長形	ве, вис ¹ , вий	вам	вас					
	短形		ти	та, тѝ	短形		ви	ва					
3	男	長形	той	нему	него ¹ , нега	長形	те	тем	тех				
		短形		го, га	му								
	中	長形	то	нему	него ¹ , нега					短形		хим, хми,	хи, ги
		短形		го, га ²	му								
	女	長形	та, те	нехи	нея	短形		им					
		短形		хи, ги, ѝ	я, е, ѝе								

1. 標準語の影響による新しい用法で、教育やマスメディアの普及する 1970 年代以前は若い世代のみが用いた。
2. 主にブルガリア・ムスリムのあいだで用いられる。

ロドピ方言では、人称代名詞単数 1 人称および 2 人称の対格と与格の長形は同形である。

— *Аѝшо чернока, каматна, / кому си вършиши басмана ?*

— *Тебе е вършем, Асане, / тебе ше да са погиздем. (IV-J-1)*

指示代名詞

ロドピ方言は、近称、遠称、総称の 3 要素からなる指示代名詞の体系を備えている。

	下位方言	男 性	女 性	中 性	複 数
近称 (C系)	スモリヤン	соя	сая	сова	сес / сейа

	フヴォイナ	сузи	сайе	сва / суй	сей / сие*
遠称 (H系)	スモリヤン	ноя	ная	нова	нее / нейа
	フヴォイナ	нузи	найе	нва / нуй	ней
総称 (T系)	スモリヤン	тоя	тая	това	тее / тейа
	フヴォイナ	тузи	тайе	тва / туй	тей / тие*

*標準語とのアナロジーで形成された近称の指示代名詞複数形 **сие**、**тие** が認められる。これらの形は新しい現象である。

*пък нема да са земеме / от **сие** пусти душмане.* (IV-I-3)

疑問代名詞

- ・疑問代名詞 **кина**

ロドピ方言特有のこの疑問代名詞は、相当する標準語の **какво** と併用されるケースが認められる。

*Чем оти ут **кина** ли е, / чем оти ут **какво** ли е?* (IV-F-1)

この疑問代名詞は、モノにも人にも用いられる。次に人に用いられた例を挙げよう。

*До тебе **кина** дохада? / — Дохада си ми, отхада / било, черноко **момиче**.* (IV-B-3)

- ・形容詞的疑問代名詞 **кутри**

この疑問代名詞は、**кутри**、**кутра**、**кутро**、**кутри** と変化し、主にスモリヤン方言で用いられる。フヴォイナ方言では、この疑問代名詞が認められず、標準語と同じ **кой** 系統の語が用いられる。

- ・関係代名詞 **кутри**

上記の形容詞的疑問代名詞は、関係代名詞として用いられることもある。

***Кутро** та дете гледало, / та ѝ на майка казало.* (IV-J-3)

動詞の体

- ・ロドピ方言には、体の扱いに標準語と異なるものがある。

видем неsv. [ロドピ方言] ~ *видя sv.* [標準語]

*Крифконо фесче **видиш** ли, / ага го крифкам, галиш ли?* (IV-E-1)

- ・他の多くのロドピ方言地域と同様に、ダヴィドコヴォ村にも **-ова-** / **-ва-** を用いて形成される古いタイプの不完了体動詞が残存している。標準語では、このタイプの不完了体動詞は **-ува-** 型に移した。そのため、標準語の普及にともない **-ова-** / **-ва-** と **-ува-** の2つの型の不完了体動詞が混在

している。

— *Писвай, растисвай, царско сѣйменче, / моюно любе немой писувай.* (VI-C-1)

ここでは音節数の調節のために2つの形が併用されていると考えられる。

動詞の多回体

доходам / дохадам, фатмам, извадам, изградам など、一部の動詞には多回体が維持されている。

— *Дохадай, любе, дохадай, любе, / въф денен по дваиш и по триш.* (IV-D-2)

動詞の時制

・現在変化

第1変化と第2変化の動詞1人称単数形で、-м と -а の2種類の変化語尾が混用されている。

и ѝе ше дойда́м на твоина свадба (IV-I-12)

— *Как да дойда́, трактористе* (IV-E-11)

これにともなって、1人称複数形では、-ме と -м の2種類の変化語尾が用いられる。

・アオリスト

標準語の-ох アオリストは、ダヴィドコヴォ方言では-ах アオリスト型の変化をする。

Врит си севдине дойда́ха, / лу мойна севде не дойде. (IV-F-1)

ただし、この型で一貫しているわけではなく、標準語の影響などにより揺れが見られる。

излезо́х да се расходя́, леле, / ис това поле широко, леле, (V-A-4)

какво ти карии излеза́х, / карии шерени катии, (IV-E-4)

またмогаは、標準語では -ах 型に属するが、ロドピ方言では -их 型の変化をする。

— *Молих та, майчо, молих та, / не можих да та измодем,* (V-A-3)

・未来

助動詞的な人称動詞 *ща* と本動詞で形成されるが、この2つの動詞の接続の仕方で2通りの未来形成法がある。

1) 接続詞 *да* を用いるもの

утре щем, овньо, да минем, (VII-3)

2) *ща* に本動詞の短縮不定形を直接接続させるもの

не щеш ли си ма приследи? (IV-H-3)

後者の形成法では、さらに、a) *ща* を短縮不定形の前に置くものと、b) 後ろに置くものの2つ

の形がある。一般に、a) は実現の可能性が高い未来を表すときに、後者はその逆の場合と使い分けられるというが、現在ではその違いがほとんど意識されなくなっていて、意味よりもむしろ音節や音調の配置具合によって使い分けられることもある。

また、標準語教育とマスメディアの普及の結果、助詞 **ще** + 人称動詞で表される未来表現も用いられる。この **ще** は、しばしば **ше** と発音される。

*ам къде **ше** ма одведеш ?* (IV-E-6)

命令形

中部ロドピの一部の地域では現在語幹が子音に終わる第 1、第 2 変化動詞の単数命令形に、**-ей** の拡張形を持つものがある。

зарей конче, дочкай ма, (IV-F-6)

アオリスト能動分詞

フヴォイナ方言では、母音で終わるアオリスト能動分詞が語末にアクセントを持つとき、この分詞の接辞を重ねる。この現象はスモリャン方言には認められない。

или ѝе извън дошлоло, (IV-F-1)

врит беха, мари, дошлили, (V-A-9)

副動詞

動詞現在語幹に**-щик** を付加して形成される。スモリャン方言やフヴォイナ方言では**-щим** の形が一般的である。**-щик** の用例は、私たちの採録歌のほかに、南 15km のアルダ川流域の狭い一帯で採録された歌にしか見られない¹。地元のインフォーマントは、この**-щик** 型副動詞形を *минало време, но не толкова далечно* (あまり遠くない過去) と説明している。

кървави ризи перащик, / секани главе скриващик. (VI-B-3)

игращим や *ходещим* など、ロドピ方言に広く見られる**-щим** 型の副動詞は、分詞と与格によって構成される古代教会スラヴ語の独立与格 *dativus absolutus* に遡るとされ、ツォネフらは語末の **-м** は、この独立与格構文の名残と解釈している。しかし、セリシチェフら多くの研究者は、この **-м** を、*пепком* などに見られる副詞形成の**-ом** に起源するとして、見解が分かれている。

この形と平行して、東方言には、*ходещиц* など **-щиц** を用いる形が認められ、私たちのテキストに現れる **-щик** との関連をうかがわせるが、語末の **-ц** については **-щик** 型の **-к** と同様にいまだ明確な

説明がなされていないのが現状である²。

1. PPPC, стр. 343.

2. 副動詞の様々な方言形については、Мирчев, стр. 243-244 および БД, стр. 249 を参照。

禁止表現

ロドピ方言では禁止表現に **немой** が用いられるが、採録された民衆歌謡には、これに続く動詞の形に 3 つのタイプがあり混在している。

1) **немой** + 動詞命令形

*Немой ма, майчо, **привадай** / агоска жетва да женам, (VII-6)*

この禁止表現では、本動詞の前に強調の **ни** が用いられることがある。

*Немой ма, майчо, **ни** карай, (III-5)*

2) **немой** + 短縮不定形

*Немой ма, майчо, **провада** / ... / агоска жетва да женам (VII-5)*

3) **немой** + да + 動詞人称形

*хич **немой** бално да **ти** ѝе (V-A-7)*

1) は北のルブチョス方言で、2) はスモリャン方言で一般的である。

зам を用いた合成接続詞

зам は、標準語では前置詞に分類され、通常 **зам да** という形で合成接続詞として用いられるとされる¹。しかし、私たちの採録したテキストには **зам да** 以外にも

• **зам ше**

— *Ялай ми, мини, юначе, / / **зам ше** ти метнам кичица, (IV-I-3)*

• **зам да**

***зам да** си любе споминаш / как са сме другош галиш, (IV-I-3)*

***зам да** ми дойдат дърваре / и майка със тех да дойде (VI-B-3)*

• **зам га**

***зам га** ми върви любено, / нахвътре да ми не гледа. (IV-K-1)*

***зам га** са женем, дар ше та дарем. (VI-C-1)*

といった **зам** を前置詞とは解釈できない用例が見られる。

その語源について БЕР, т. 1 は、към < къ + м と同様に зам < за + м というプロセスを経て形成されと説明している。一方、これに関連してキリル・ミルチェフは、興味ある見解を提出している。彼は、зам を上記のように前置詞 за に起源を求めず、接続詞 зам < зан < зане に由来するとする。17-18 世紀のブルガリア語には、зане да が зан да あるいは зам да と変化して合成接続詞と用いられる用例が頻繁に見られるようになるが、その理由は、「接続詞 зане が新ブルガリア語時代に入るとすでに廃れて非生産的な要素になり」、「この合成接続詞の前の部分、つまり зане > зан > зам が古くからの意味を失っていたので、そのためこれに新しい理由を表す接続詞 да が加えられることになった」ためであると述べている²。このミルチェフの説を手がかりに考えてみると、採録テキストに現れてくるロドピ方言の зам は、古くからの接続詞としての意味を残存させているとも考えられる。

-
1. НГ, т. 2 и РБЕ, т. 5.
 2. Мирчев, стр. 263.

前接語とその位置

採録した民衆歌謡において、アクセントをもたない前接語は、関係する語からかなり離れた位置に置かれる場合がしばしば観察される。

да са умира, умре ща, / ам са лу ницо не прави, (IV-F-15)

民衆歌謡に用いられる語形

民衆歌謡では音節数を合わせるため、所有代名詞後置冠詞形が、女性、中性、複数形で мойна, мойно, мойни の形を取ることがある。

Пило ли ѝе мойно стадо вода, (VII-4)

また同様に所有代名詞 наш, ваш の後置冠詞形は、音節数の調整のために нашна, нашно, наши のように代名詞の性を指示する母音を脱落させることがある。

да си видям нашно село, нашно село, нашна коща, (VII-7)

この現象が可能になるのは、文法上の性の指示が、後置冠詞形にゆだねられているためである。

注釈の原則

- 1) 注釈は、各章および各節の冒頭の総論的な「解説」、個々の歌の語彙や語法を注釈した「語注」、および歌全体の問題を論じた「註解」から構成される。
- 2) 語彙の注釈は、原則として、基本的なブルガリア辞典で入手も容易な Л. Андрейчин и др., Български тълковен речник, София, 1994⁴に見出し語のない語につけた。ただし、見出し語になくても、音韻変化の原則から容易に判断できるものは除いた。
- 3) 引用した主要参考文献は巻末の文献表に指示してある略語で示し、文法用語なども語注で略語を用いて示した。また、テキスト編の採録歌の章、節、歌の各番号は、例えば IV-F-1 と表記した。
- 4) トドル・ストイチェフ¹やスタイコ・カバサノフ²らの優れた方言語彙研究からの情報や引用は、煩を厭わずこれを明示し、当該語彙がロドピ地方特有の語彙として扱われていることを明示した。
山がちのロドピ地方では、谷を隔てて語義や語法が変わるといった現象がしばしば観察される。そのため上記の語彙集では十分説明のつかない問題も多い。これらについては、現地インフォーマントから情報を集めその上で編者が判断したが、彼らの意見をなるべく注釈に加えるようにした。
ロドピ地方特有の語法や語順についても、スタイコ・カバサノフ²、スラフカ・ケレメチエヴァ³、エレナ・カネフスカ＝ニコロヴァ⁴らの方言研究に依拠して同様の手続きをとった。
- 5) 注釈は、通読を前提とせず、各テキストでまとまりのある説明になるように心がけた。そのため、重複が多くわずらわしくなった部分も少なくない。読者諸氏のご寛容をお願いしたい。
- 6) 採録されている歌は、成立年代や成立場所のわかっているものはきわめて少ない。また伝承過程で、さまざまな変容や解釈を受けている。これらの点も考慮して、注釈では、伝承された社会や時代、生業のありかたなど周辺のレアリアを探り、人びとのメンタリティ、振る舞いや衣装などに現れた印を読み解くことで、なるべくこれらの歌が歌われた地域社会と切り離さずに理解するように努めた。それが納得のゆくものになっているか否かは、読者諸氏のご判断をおおぎたい。

1. РР, кн. 2, РР, кн. 5 и РРРС.

2. ГСМС, стр. 69-88 が方言語彙集で、ГСМС, стр. 5-69 が方言文法解説となっている。

3. ГР.

4. Каневска-2001 и Каневска-2006.

テキスト篇正誤表

頁	個所	行	誤	正
17	本文	10	Сахида	Саида
42	本文	22	сърце са с вода	сърцено с вода
	本文	25	Сърце са с вода	Сърце със вода
48	本文	9	малд	млат
	本文	13	Теп	Теб
60	本文	2	двадш	дваш
68	本文	7	череше	череши
99	本文	5	Сюдман	Сюлман
100	梗概	5	横になりましたよ	横になりましたよ
124	本文	8	бройме	броиме
	本文	9	бройме	броиме
129	梗概	3	愛撫	キス
131	本文	4	сърце ма немой поглевай	сърце, ма немой поглевай
137	本文	4	когдано	когано
		5	Когдано	Когано
151	本文	14	Пйни	Пийни
152	本文	15	пйни	пийни
164	本文	4	млака	малка
169	梗概	1	トルコ人を好きになりました	トルコ人にキスをしました
	梗概	1	彼を好きになりました	彼にキスをしました
181	本文	8	— Как да та,	— Каг да та,
	本文	9	как да та,	каг да та,
198	本文	10	сърцесо ма боли,	сърцесо ма боли
209	本文	7	мои	мое

213	本文	16	комшиче	комшийче
222	梗概	5	夜を過ごした	夜になった
241	本文	5	лефетер	лефтер
243	本文	9	шенлифко	шенливо
252	本文	12	пйни	пийни
	本文	13	пйни	пийни
265	本文	26	куковичку	куквичку
	本文	27	куковичку	куквичку
275	本文	26	йунесат	юнесат
	本文	27	йунесат	юнесат
283	本文	8	дойдаха	дойдоха
	本文	10	й	й

* 行の数字は、本文の場合はテキストに付せられた行数を、梗概の場合は上からの行数を表わす。

目 次

	まえがき	iii
	採録地ダヴィドコヴォ村について	v
	歌謡集に見られる方言的要素について	viii
	注釈の原則	xix
	略語表	xx
	テキスト編正誤表	xxi
I	神話的歌謡	1
II	歴史・叙事	31
III	儀礼歌	47
IV	恋愛歌	63
	恋愛歌の成立	65
	恋愛歌の項目	68
A	恋への憧れ	71
B	出会い	80
C	幼い娘の恋	97
D	両親と恋する娘・息子たち	105
E	恋の駆け引き	124
F	恋の炎	143
G	遠くにありて思う恋	172
H	駆け落ち	186
I	実らぬ恋・不幸な恋	203
J	嫉妬	228
K	浮気・道ならぬ恋	234
L	恋の戯れ歌	250

V	家族		259
	A	母と娘	265
	B	父と娘	284
	C	母と息子	286
	D	母と息子と娘	309
	E	夫婦	312
VI	社会		325
	A	世態	328
	B	事件	340
	C	戦争と兵役	351
VII	労働		367
VIII	病と死		387
		主要参考文献略語表	421